



週報

五月十五日號

『派遣軍將兵に告ぐ』

武力作戦の重要性
佛印ルートの爆撃
近東の現状

特別二千六百年史抄(十三)

内閣情報部参典 菊池 寛

第一八七號

昭和十五年五月十五日號

郵政省認可 (毎週一回水曜日發行)

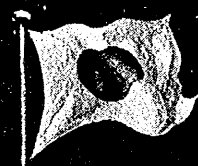
五錢

週

報

昭和十五年五月八日發行 (毎週一回水曜日發行)

内閣印刷局印刷發行



支那事變

報國債券

一等割増金

一萬四千五百圓

一枚四十圓五

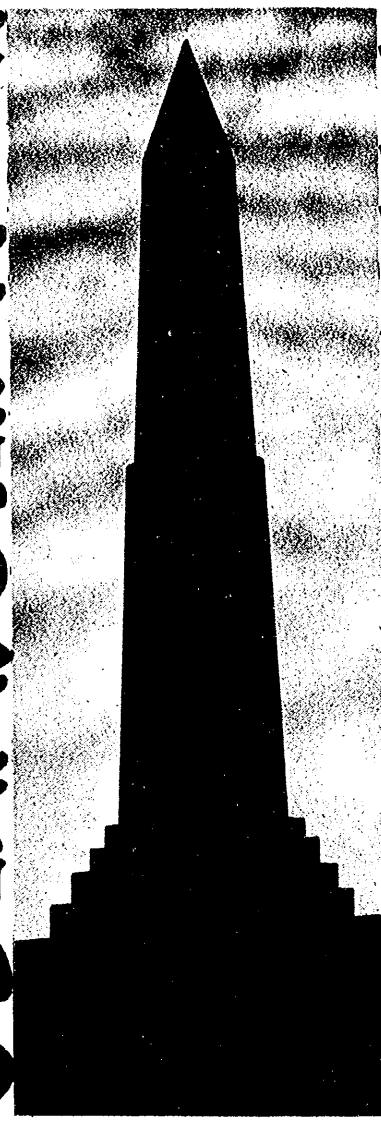
五月三十日 ← 十二月五日

大藏省・日本勸業銀行

(判A5規格規定はさき大の書本)

露光量違いにより重複撮影

新東亜 百二十億の貯蓄から



週報 (五月十八日)

支那派遣軍司令部編纂

派遣軍將兵に告ぐ

武力作戦の重要性

陸軍省情報部編纂

その後における

佛印ルートの際撃

海軍省情報部編纂

近東の現状

外務省情報部編纂

昭和十六年史抄 (十三)

内閣情報部編纂 菊池 寛 編

週間誌

五月三日(金)前野定雄
▼四月九日より五月二日まで
英艦に與へた損害百卅五隻と獨
逸表

表 ▼ソ聯最高軍事指導機關と
して國防委員會創設、議長にウ
オロシエロフ元帥決定
五月八日(木)

五月六日(日)
▼日・ウルグワイ通商航海條
約去る四日批准交換せる旨外
務省情報部發表 ▼ヒュース
スウェーデン國王とスウェー
デン中立維持につき親書を交
換せる旨獨逸政府發表

▼全國中小學生の修業旅行制限
協力を次官會議で申合す ▼ハ
ワイよりの全兵力移動を無期限
に停止する旨ハワイ海軍當局發
表 ▼チャールズ英海相下院で
諾戦不利の理由を報告
五月九日(火)

五月七日(水)
▼安部磯雄氏等の勸導團長黨
の結成準備會に結社禁止命令發
せらるるマ那人の渡支旅行制限の
要綱閣議で決定(五月廿日) ▼艦
隊主力を富分ハワイ水域に残留
せしむるに決した旨米海軍省發

▼横須賀鎮守府司令長官に親補
された及川古志郎大將門司歸
還 ▼臨時興亞院會議總理大臣
官邸に聞き、法幣對策を協議す
五月十日(木)
▼米幣對策、消費現正その他に
關する重要經濟對策閣議開かる

露光量違いにより重複撮影

新東亜 百二十億の貯蓄から

週報 (第一八七號)

五月十五日

内閣情報部編輯

派遣軍將兵に告ぐ

支那派遣軍總司令部：二

武力作戦の重要性

陸軍省情報部：六

その後における

佛印ルートへの爆撃

海軍省海軍軍事普及部：一六

一 國際時事解説

近東の現状

外務省情報部：七

特別二千六百年史抄 (十三)

内閣情報部參與 菊池 寛 三

週 間 誌

五月三日(金)前號追加

▼四月九日より五月二日までに

英艦に與へた損害百卅五隻と獨

發表

五月六日(月)

▼日・ウルクワイ通商航海條

約去る四日批准交換せる旨外

務省情報部發表 ▼ヒ總統

スウェーデン國王とスウェー

デン中立維持につき親書を交

換せる旨獨政府發表

五月七日(火)

▼安部磯雄氏等の勤勞國民黨

の結成準備會に結社禁止命令發

せらる ▼邦人の渡支旅行制限の

要綱閣議で決定(日實誌) ▼艦

隊主力を當分ハワイ水域に残留

せしむるに決した旨米海軍省發

表 ▼ソ聯最高軍事指導機關と

して國防委員會創設、議長にウ

オロシロフ元帥決定

五月八日(水)

▼全國中小學生の修學旅行制限

協力を次官會議で申合す ▼ハ

ワイよりの全兵力移動を無期限

に停止する旨ハワイ海軍當局發

表 ▼チャーチル英海相下院で

諸職不利の理由を報告

五月九日(木)

▼横須賀鎮守府司令長官に親補

された及川古志郎大將門司歸

還 ▼臨時興亞院會議總理大臣

官邸に開き、法幣對策を協議す

五月十日(金)

▼米幣對策、消費規正その他に

關する重要經濟對策閣議開かる

派遣軍將兵に告ぐ

支那派遣軍總司令部

天長の佳節に當つて、支那派遣軍總司令部で、『派遣軍將兵に告ぐ』のパンフレットを現地將兵に配布したが、派遣軍將兵に限らず、銃後國民としても一讀すべきものであるから、こゝにその全文を掲載することにする。

一、事變發生の根本原因

東洋に對する自覺の缺如 世界に先行せる道義文化の傳統を共有し、二千年來の友好關係を繼續してきた日支兩民族が、近世において兎角非友敵的對立抗爭狀態を現出した根本原因は、主として共に東洋人たるの自覺を忘却し、個人主義的歐米物質文化に眩惑したことに歸するものである。即ち近世における支那の爲政者が事毎に歐米諸國に依存し、その力を利用して我が國の發展を阻止せんとして、兄弟牆にせめぐの端をなし、自らその殖民地たる地位に沈淪するに至つたこと、また一方、日清戰爭に勝つたわが國民が、戰勝國の地位において支那に臨み支那人を輕侮し、歐米人に對しては先進民族としてこれに阿諛し、その前には屈すべからざる膝をも屈するものあり、強國の大理想を忘れ、侮支拜歐の弊に陥つたことが、期せずして今日の事態に立至つた所以である。従つて兩國民が共に東洋への自覺において日支關係の根本的是正を圖ること

が、今次事變の目的である。

蓋し、科學的文化の上では、遺憾ながら後進國であつたわが國が、近代國家への躍進過程として以上の経過を辿つたことは、眞にやむを得ざるものであつたといへ、反面また誠に慨はしいことであつた。

爾來わが國力の飛躍は著るしものがある。明治維新當時においては、たゞひたすら自國の擁護を全うするだけの實力しか持たなかつたものが、日露戰爭においては、獨力よく露國の極東侵略を挫き、滿洲事變においては、正を履んで恐れず敢然として國際聯盟を脱退し、更に今次事變においては、東亞再建の理想の下に、新秩序建設の大旗を掲げて驟起するに至つた所以は、偏へに御稜威の下、先輩忠烈の貽績による國力の充實に伴ふ國民的自覺に基づくものである。即ち、われ等は今や正に東洋民族の先覺として、東洋への自覺、東亞の再建といふ歴史的大轉機に直面してゐるのである。

歐米諸國の侵略的策動 英國が東洋侵略を開始したのは、今を距る約二百年前のインド經略に端を發してゐる。人口三億五千萬のインドをその殖民地として尙ほ飽き足らず、更に支那に歩を進め、百年前の阿片戰爭によつて香港を取り、上海、天津の租界を獲得し、逐次揚子江を制し來つたのであるが、わが國の驟起と支那民族の覺醒によつて、その露骨なる侵略方式を變更し、支那を援けてその統一に或る程度の助力を與へ、これが代償として財政、金融上の實權を掌握し、政治、經濟上殆んど獨占的地位を占め、わが國の進出發展に對しては對立の勢を示し、抗日政策を採らしめたことが今次の事變に至つたのである。

阿片戰爭の本質は、インド人の作つた阿片を安く買上げて之を支那人に高く賣りつけ、その利益は英本國商人が獨占し、その結果として支那人を矮人化し來つたものである。新らしい支那の自覺した青年によつて起された辛亥革命の進展に伴ひ、列強擄奪の殖民地的地位から脱却せんとした排外運動の第一目標が、英國に

向けられたのは理の當然であつたが、爾來彼はその高壓的政策を巧みに偽裝轉換して支那の民族運動を援助し、その鋒先を排日に轉向せしめ、日本の進出を阻止して今次の事變に至つたのである。

一方ソ聯は、帝政ロシアの崩壊と滿洲事變の結果とにより、支那特に滿洲に扶殖せる既得權益を喪失したため、外蒙及び新疆省方面より支那の侵略と東洋の赤化とを企圖し、その第一著手としてガロン、ポロチンを派遣し、辛亥革命の帷帽に參畫させて巧みに共産黨の勢力擴張を圖り、支那の民族運動に便乗して極東における強國たる日本の大陸進出を妨害せんと試みたのである。

英國が主として浙江財閥を基礎とする國民黨内に勢力を占めて、その既得權益を擁護せんとするのに對抗し、ソ聯は共産黨を操縦し主として農民層にその新興勢力を扶殖せんとしてゐることは明瞭な事實である。従つて國共兩黨は背後の力を異にしその本質を異にしてゐるから、對立抗争するのは當然のやうであるが、抗日といふ共通の目標のために犬猿同行、國共合作を以て今次の事變に臨んだのである。

最近重慶内部や山西、河北兩省等において國共の衝突を傳へられてゐるのは、歐洲事變の反映とも見られるのであつて、英ソ兩國の關係が對立状態にある現状より見て當然の傾向である。

蘆溝橋事件の直後、わが國は終始不擴大方針を堅持してきたのであつたが、歐米、ソ聯の使嗾煽動を受け抗日政權は自己の犧牲に盲目となり、わが國との間に時局を收拾せんとする反省の餘裕なく、遂に今日の如き未曾有の大戦状態に進展したのである。

英國が最近日本に妥協的態度を示してきたことは、在支既得權益の過半が上海を中心として、わが占據地域内にあるため利害を打算した結果と、歐洲の情勢切迫による當然の行動向である。これに反し、共産黨の根據地が占據地域と對蹠の西北支那にあり、且つまた日支抗争による兩國の疲弊は、赤化促進の好條件で

あるから徹底抗日を呼號し、重慶政權を脅迫して抗戰繼續の盲動をなしある所以である。

二、交戰の對象は何か

抗日政權の迷妄打破 現在重慶には英、米、佛、ソ聯等の大使が集合して何事かを畫策してゐる。英、米、佛は何とかして重慶を助けて日本の腰の挫けるのを待ち、ソ聯は日支の抗戰繼續によつて日本の對ソ戦力の消耗と、支那の疲弊による赤化の促進とを策しつゝあることは誰しも判断し得る所である。即ち、わが交戰の對象は英、米、佛、ソ聯の煽動に躍りつゝある抗日政權及びその軍匪であつて決して支那の良民ではない。従つてこれら抗日政權及びその抗戰力の主體たる軍匪は本事變の目的に鑑み徹底的に膺懲し、これが鑪炭反省を見るまでは五年でも十年でも戦争は繼續しなければならぬが、刀折れ矢盡きて我に降り、或ひはその誤りを覺つて歸順して來たものはこれを寛容すべく、また無辜の良民は心からこれを緩撫し、弱きを扶け強暴を挫くべきわが傳統の武士道を、この聖戦において遺憾なく發揮することが派遣軍將兵に課せられた大使命である。

歐米諸國の對日敵性の本質 英米佛等の諸國が重慶政權を援助してゐる根本目的は、前述の外、日本の援助による支那の獨立解放を恐れてゐるからである。即ち、彼等は支那乃至東洋を永久に殖民地の狀態におき、本國人の利益を基礎とし搾取の對象としてこれを維持することを念願するものであり、またソ聯の企圖する所は抗戰繼續による日支兩國国力の消耗であつて、共に道義に反し打算に立脚するものである。なほ彼等の我を危惧する理由として、極東よりの閉出し放逐を受けるといふ眩影恐怖感を擧げることができる。これは東亞再建と東亞閉鎖との錯覺である。支那の獨立完成と日支の善隣結合とは、何等第三國の排除を意

味するものではない。彼等の正當善意の協力は寧ろ望む所であり、これ萬邦協和の本領なのである。聖戰の眞義が御詔勅に炳かなる如く、東洋の平和であり、道義の顯現であり、抗日支那の反省を促し、その建設に協力するものであればこそ、我等は堂々天地に愧ぢず、千萬人と雖も我往かんとの信念を以て邁進しつゝあるのである。打算に立脚した列國の向背は一時の現象であつて、吾人が正道を履んで終始渝ることなければ、天下に敵なく道義は必ずその光りを放つであらう。

三、大御心を拜察せよ

事變發生當時の御勅語と本庄將軍滿洲より歸國の際の御下問 第七十二帝國議會開院式に賜はつた御勅語において「帝國ト中華民國トノ提攜協力ニ依リ、東亞ノ安定ヲ確保シ、以テ共榮ノ實ヲ擧クルハ、是レ朕カ夙夜軫念措カサル所ナリ。中華民國深ク帝國ノ眞意ヲ解セス、濫ニ事ヲ構ヘ、遂ニ今次ノ事變ヲ見ルニ至ル。朕之ヲ憾トス。今ヤ朕カ軍人ハ、百艱ヲ排シテ、其ノ忠勇ヲ致シツツアリ。是レニ中華民國ノ反省ヲ促シ、速ニ東亞ノ平和ヲ確立セムトスルニ外ナラス」と明示し給へるを拜察し奉れば、聖戰の眞義嚴として炳かである。

滿洲事變一段落を劃して内地に歸還した本庄將軍が「天皇陛下に拜謁を賜はつた際、第一の御下問は「三千萬の民衆は滿洲國の成立を喜んでゐるか」との意味の御言葉であり、次に「北滿の水害對策は出来てゐるか、第一線の將兵は元氣か」との意味の御言葉であつたと洩れ承つてゐる。

優渥にして御仁徳無邊なるこの御勅語と、この御言葉を拜しつゝ、今なほ我が國民の中に非道義的權益的收穫を聖戰の結果として期待してゐるものがあることは、誠に恐懼に堪へない次第である。

八紘一宇の眞義と東洋平和の再建 「上ハ則チ乾靈ノ國ヲ授ケタマヒシ徳ニ答ヘ、下ハ即チ皇孫ノ正ヲ養ヒタマヒシ心ヲ弘メム。然シテ後ニ六合ヲ兼ネテ以テ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ヒテ宇ト爲ムコト、亦可ナラスヤ」とは神武天皇御即位の大詔であり、道義を根本となし正義に則り正道を履み、四海同胞、萬邦協和の實を擧げること我が建國の大精神である。東亞の再建とはこの大詔を奉體し、この建國精神を東亞において實踐するに外ならず、東洋への自覺において正しきを養ふこと、即ち東洋道義の再建を根本とするものである。廣く貴賤、貧富、強弱を問はず慈しみ給ふ 天皇陛下の大御心は、太陽の御光りの如くであらせられるから、内外に光被し久遠に偏照して窮りなく、その光り正しきが故に強く、正しきが故に久しきを得る所以である。

歐米諸國の支那、インド、アフリカ等に對して採りつゝある資本主義的侵略や、ソ聯の企圖する階級闘争による世界革命は、他國または他民族を犠牲として自國民のみの繁榮を圖るものであつて、天地に愧ぢざる大道ではない。従つて能く久しきに互ることができないであらう。現下世界を擧げて動亂の渦中に投ぜられつつあるのは、かくの如き非道義的性格を有する世界政策の齎した當然の混亂である。われ等は八紘一宇の眞義に徹し、以上の如き混亂から東洋を救ふため、自ら先づ道義を實踐し、その結果としての日滿支三國の結合により東洋永久平和の基礎を確立し、以て大御心に對へ奉らねばならぬ。

四、事變は如何に解決すべきか

事變解決の根本觀念 八紘一宇の理想は萬邦協和の建設であり、東洋平和は萬邦協和への第一歩である。東洋を救つた後には世界を救はなければならぬ。

しかし東亞再建、即ち、東亞新秩序建設のためには、先づその基礎である日滿支三國の關係を道義的基礎の上に物心兩面に互に調整結合せねばならぬ。これが今次事變の直接目的であり、日露戦争、滿洲事變、及び今次事變はこれが歴史的な努力の過程である。即ち、今次事變の本質は、消極的には、日滿支三國の安定確立に關する努力であり、積極的には東亞再建への發足である。

日滿支三國關係の調整結合に關しては、既に國策として善隣友好、共同防共、經濟提携の三原則が提唱せられてゐる。即ち、三國は道義を以て一致の根源となし、國防及び經濟の協力を以て重しとなすものであつて、相互に國家民族の本領特質を尊重して相提携し、互助親睦の好誼を厚くし、隣邦相戒めて唯物赤化の侵襲を防ぎ、平等互惠の經濟を以て長短相補ひ、有無相通するの實を擧げ、以て東洋未來の道義文化を保全發展せしむべきであり、この關係は東亞再建の基礎であり、模範であらねばならぬ。

日本は支那の統一強化を望むか、細分弱化を望むか 支那が眠れる獅子として尙ほ獅子の威力を有してゐた時には、列國の東洋侵略を遠慮させてゐたのであるが、日清戦争の結果眠れる獅子の弱體を世界に暴露したために、歐米諸國の侵略を見たことは歴史の明示する所である。

支那の獨立を脅威せられることは東洋の平和擾亂であり、日本への脅威である。從來やゝもすれば、支那を細分弱化してこれを操縦せんとするやうな考へを持つ者が絶無ではなかつたが、この考へは支那を侵略せんとする歐米諸國の模倣であつて斷じて聖戰の目的ではない。

日本が支那の内部に火の如く起り、つある支那統一の民族的要求實現に、如何なる協力をも惜しまざる大決心を固めた時に、始めて日支善隣の結合は得られるものである。萬一日本人にして支那人を嘯して不當の所得を望み、或ひは外國に倣つて支那を日本の殖民地の如く考へる者があつたなら、道義日本の本質に反

するものであり、到底天に愧ぢざる信念を持つことはできない。

聖戰の眞義は、道義による新秩序の建設にあることは炳乎たる大方針であるから、總ての施策もまた言行一致の誠意を以て臨まねばならない。

歐米諸國の唯物的非道義的政策による舊秩序(資本主義的支配または階級闘争的革命)の清算是正を目的として起つた聖戰の眞義を、何等の未練と懸念なしに現實において示すことを、我等の念願とし理想としなければ大御心に副奉る所以ではない。

滿洲建國の根本精神を想起せよ 日清日露戦争、滿洲事變による幾萬の尊い犠牲を以て生まれた滿洲帝國は、民族協和の新原理による道義國家である。先般日本より進んで治外法權や附屬地行政權を還付して、滿洲國の健全なる發展強化に善隣としての道を盡したのは、内外齊しく知る所であらう。爾後の滿洲國は隆々たる發展を示し、世界動亂の渦中においても三千萬の民衆のみは戰禍を受けることなく、その居に安んじその業に樂んでゐる。

滿洲國が以前のやうな張軍閥の搾取下にあつたならば、恐らくは今頃はソ聯の一屬領となつて三千萬の良民は塗炭の苦しみを嘗め、或ひは第二の日露戦争が滿洲の野に展開されてゐたかも知れない。

東亞新秩序と東亞聯盟の結成 東洋諸國が桃源の甘夢から醒めた時には、歐米諸國の爪牙が既にその心臓部に喰込んでゐたのである。

支那が百年前に覺醒してゐたならば、支那の獨力で歐米諸國の侵略を防止し、阿片戦争も日露戦争も、或ひは今次の事變も免れ得たであらう。

元來日支兩民族は歴史的に二千年の交誼を有しつゝも、西洋諸國との接觸以前においては國を擧げての

干戈を交へた事例がない。日滿支三國が個々に分裂抗争すればこそ歐米に侵略擄取の機會を與へるが、三國が眞に結合すれば恐らく世界の何れの國と雖も一指をも染めることが出來ないであらう。即ち、東洋永久平和の基礎は日滿支三國の道義的結合の上に東亞聯盟を結成し、善隣友好の關係を維持し、東亞侵略の暴力に對しては共同防衛に任じ、相倚り相扶け互恵の經濟を以て有無相通じ、三國國力の充實發展を圖ることによつてのみ實現せられ、延いては東洋における他の諸民族の自主正常の發展をも助成し、萬邦その福祉を俱にするの世界平和に貢獻し得るのである。

東亞新秩序、即ち東亞再建は、以上の如き日滿支三國の善隣結合を中核とし、これを全東亞に發展せしめんとするものであつて、その庶幾するところは東亞の各國家民族がそれく安任の處を得、近隣親睦、互助協力し各、その天分を遂げて興隆し、以て東洋の道義文化を再建發展せしめんとするに在り、その要點は、道義的基礎の上に各國家民族の自主獨立と國防及び經濟等の相互協力關係とを律することである。東亞聯盟の眞義は、右のやうに道義的基礎の上に東亞の安定と發展とを確保し、世界平和の再建に貢獻せんとするものであつて、先づ日滿支三國を以てこれが基礎となすも、三國以外の諸國が之に加入することは固より當然の發展として期待する所であり、また歐米諸國にしてこれに偕行協力せんとするにおいては、勿論喜んでその進出を迎へるものである。

五、派遣軍將兵は如何に行動すべきか

眞個の日本人たれ 日本内地において今なほ聖戰の眞義に徹せず、西洋模倣の侵略思想により權益的代

償を求める觀念を清算し切れない者のあることは遺憾である。陛下の萬歲を遺言とし、東洋平和の人柱となつた十萬の骨の上に築かれるものは皇道の宣布であり、東洋道義の確立であり、その結果としての東洋の平和である。求めざる心によつてのみ永遠の平和が求められるのである。力を以て求めたものは力を以て奪回せられ、道によつて得たものは道に恃らざる限り喪はれない。

前に講述した御勅語の中に「中華民國深ク帝國ノ眞意ヲ解セス」と宣はせられてゐるのを拜誦して恐懼に堪へないことは、事變前において我々日本人が、眞の日本人として大御心を奉體しこれを支那人に傳へ、支那人をして大御心を理解せしめるの努力に缺けてゐた點である。

事變解決の根本條件は、一億の日本人が速かに歐米的思想より覺醒し、眞の日本人に立廻りて日本の眞の姿を確認し、國を擧げて帝國の大理想實現に身命を捧げる決意を固めることを第一とすべきである。東洋へ東洋へ還す前に、先づ日本人は日本人に還らなければならぬ。

皇軍たるの本質に徹し身を以て道義を實踐せよ。皇軍の特質は、道義の軍として皇道を宣布することをその使命とするにある。陛下の軍人、陛下の軍隊は行往坐臥、たゞ大御心を奉體し身を以て實踐しなければならぬ。聖戰遂行の第一線に立てる派遣軍將兵が、その行狀において天地に愧づるやうなことがあつては大御心を冒瀆し奉り、支那人に、反つて永久の恨みを残すこととなる。人心を逸して聖戰の意義はない。掠奪暴行したり、支那人から理由なき餓別饗宴を受けたり、洋車に乗つて金を拂はなかつたり、或ひは討伐に藉口して敵性なき民家を焚き、または良民を殺傷し、財物を掠めるやうなことがあつては、如何に宣傳宣撫するとも、支那人の信頼を受けるどころか、その恨みを買ふのみである。従つてたとひ拔群の武功を樹てても聖戰たるの戦果を全うすることはできない。

十萬の英靈は地下で我等の行状を見守つてゐる。司令部や本部は率先して自肅自戒、常に第一線將兵の上に想ひを致し、第一線將兵は戦死した英靈に想ひを致して、その身を正しく律することが生残つた者の當然の道である。

長期戦勝の素因は志氣の振張りに在る。聖戦の目的を貫徹するまでは、五年でも十年でも戦はなければならぬ。征戦久しきに彌るも軍紀の弛緩を來さない爲めには、特に上級者の自肅自戒率先垂範を先決としなければならぬ。

敬、信、愛を以て兩民族を永久に結合せよ。「弱きが故に助ける」といふ氣持(愛)は、日本人の傳統的性格である。聖戦の出発點は、歐米諸國の策動に利用せられて盲動する抗日政權を膺懲し、虐げられたる良民を救はんとする精神に立脚してゐるものであるが、戦後に期待する日支兩民族永久結合の爲めには、更に一步進んで支那民族の本質を正視し、その長所を見出しこれを尊重し、信をその腹中におくの雅量を必要とするものである。

我を騙すかも知れないと用心してかゝれば、對手もまた何時までも解けない氣持を抱くことは、個人の交際においても國家の關係においても同様である。四千年の古き歴史と、歐米に先覺せる文化を持ち、わが國と二千年の友好關係にあつた支那であり、兵匪の暴掠や天災地變に脅かされても誰人にも訴へる能はず、また最近においては歐米諸國の資本主義的侵略に押取せられながらも根強く生存し、孜孜營々として大地と共に生きてゐる支那人を見て、その靱強とその忍苦とその素朴とに美點を認め、一度や二度の背負投げも喜んで受けるだけの腹を進めば、必ずや兩民族の精神的結合に到達し得るであらう。

日本を信頼せよ、日本人と提携せよ、と如何に叫んでも、支那人が心から日本を信頼し、日本人を信用す

るに至らない限り一方的である。

我等は支那人に呼びかける前に、先づ己を眞の日本人として正しくすることが先決條件である。

英靈を冒瀆すべき不良邦人を戒勸遷善せしめよ 軍に跟随し、同胞の先驅として大陸に進出した邦人中には、或ひは宣撫に、或ひは看護に、獻身犠牲的活動をなし職に殉じたもの、また現に活動をなしつつあるものも少しとはしないが、日本人の面汚しも亦少からざる現状である。法に觸れたもの多しは勿論、觸れないもの雖も道徳的に指彈せられるもの甚だ多い現状は、遺憾ながらこれを認めざるを得ない。

上海、南京、天津、北京等の夜の状況を一巡すれば、如何なる状態にあるかを判断することができよう。遊興の盛には不正があり勝ちであり、支那人を賤し辱して不正に利得を貪り、或ひは敵側に利することを知りつゝも營利のため敢へてこれを爲し、或ひは外支人の手先となりて我が方に不利となる行爲を敢へてする者、なかんづく外人に對し名義貸しをなし不當の利得をなすもの、或ひは個人の利益のみを圖りて全般的統制指導を拒否するが如き者がある状態では、何時まで経つても聖戦の成果を収めることができないのみならず、日支兩民族を永久抗争に導くものである。派遣軍將兵は先づ身を以て自肅の範を示し、不良邦人の反省自覺を促し、十萬の英靈を冒瀆するやうな結果を來さしめない心構へを以て、足下を淨めることに努力しなければならぬ。

十萬の英靈は、不良邦人が、懐を肥やすために日支兩民族を再び抗争に導くやうな結果を見たら、地下で何と訴へるだらう。英靈を慰めるの途は、單に禮拜供花のみでは足りない。その骨の上に築かれる日支永久の結合を實現させることに全力を盡すことが生残つた將兵一同の義務であり、また英靈に對する最善の供養である。

支那人の傳統と習俗を尊重せよ 支那には支那の傳統があり、支那人には支那人特有の習俗がある。

これを尊重しこれを理解してその面子を尙ぶことは絶対不可欠の要件である。日本人は眞の日本人たると共に、支那人が眞の支那人たることを尊重せねばならぬ。友好には寛容と同情とが必要である。日本の法則を支那に強ひたり、日本人が支那の内政に干渉したり、日支合作を唱へながらも支那人を傀儡視したり、または其の習俗を無視しては、何如なる創意妙案と雖も實績を擧げ得るものではない。宜しく支那自體のことは支那人に委せ、信をその腹中におく雅量^{みやうりやう}を以て接しなければならぬ。

正當なる第三國人に對しては寛容であれ。破邪顯正^{はくじあきただし}は皇軍の使命である。皇道宣布のためには、國を擧げて起つべきは、わが國民の信念であると同時に、無力の弱者を庇護することもわが武士道の本領である。今やわが占據地域内に關する限り、第三國權益の如きはわが大軍駐屯の前には無力無抵抗の存在である。この裡にあつて、遠く故國を離れて生存する第三國人に對しては、正當にして利敵行爲なき限り、支那の良民と同様寛容を以てこれを選し無用の危惧を去らしむべきである。東亞再建は萬邦協和への段階であるから不當利敵のものはこれを排するも、正當不偏のものは斥けるべきではない。戦時の要求存在するの故を以て平時も永久に然らんとする彼等の危惧に對しては、わが要求の限度を吟味してこれを明示し、わが公明なる眞意を諒解せしめざるやうに教へ且つ導くべきである。過去に過てるが故に現在においても咎め、本國非道の故を以て罪なき個人に報復することは皇軍將兵の爲すべき所ではない。若しそれ彼等の本國が聖戰の眞意を曲解し、東亞の擾亂を圖るものあらば、堂々國家の決意において破邪顯正一刀兩斷の施策をなすものである。

六、交代歸還將兵に告ぐ

聖戰久しきに互るに従ひ、内地に交代歸還する將兵の言動が日本の國內に與へる影響の如何に強いものが

あるかを深く省る必要がある。

征戰三年、あらゆる困苦に堪へ彈雨を嘗して得た精神的收獲は歸國と共に消滅し、物質萬能の世相に掩込まれることがあつてはならぬ。戰爭に來なかつたものが樂をして金をため、或ひは高い地位にありついでゐる等の矛盾せる現實を捉へて、歸還將兵に呼び掛ける團體破壊の左翼運動が潜行してゐることも警戒すべきである。戦友を失ひ、部下を殺し、上官を亡くした者の考へなければならぬことは、地下の英雄が何を望み、何を期待してゐるかの一事である。皇國日本の姿をますます高く世界に顯現し、東洋平和の御詔勅を奉じ、陛下の萬歳を遺言として骨を曝したのである。若しこの英雄を冒瀆するやうな國內の醜狀、國民の無自覺あらば、敢然として起ち皇運を扶翼し奉り、聖戰の目的貫徹に向つて國內を導くの覺悟を必要とするのは言を俟たないところである。生命を彈雨の危険に曝し、幾度か死線を越えて得た精神的收獲は如何なる物質を以ても購ひ得ない賜ものである。歸還後物質萬能の世相に收退することなく、皇國民の精神的中核となつて郷黨を指導することは、生き残つたものの英雄に對する義務である。

歐洲においては昨秋以來第二の大戦状態を呈し、東洋に對する列國の干渉は、そのためにやゝ緩和の狀態にあるが、利害打算を信條とする歐洲各國が、打算の取れない戰爭を永續するものと期待してはならない。何時平和(國より武装平和であるが)状態になるかも豫測できない。このときにおいて彼等が歐洲に得られなかつたものを東洋に求め、また第三國が連袂して對日干渉を試することも當然豫期しなければならぬ。

第二、第三の國難が、内外兩方面より神國日本への試練として加へられることを豫期し、挺身難に赴くの準備を整へ、以て 大元帥陛下の信倚に對へ奉ることが十萬の英雄に對する何よりの世養である。

武力作戦の重要性

陸軍省情報部

一、武力作戦の重要性

汪精衛氏を中心とする支那新中央政府の成立によつて、事變處理の過程が一進展したことは事實であるが、これによつて武力戦のもつ役割がいさゝかでも軽減されるだらうと考へたり希望したならば、大いなる誤算である。殊に事變の本質が、領土や賠償を目標とせざる以上、武力戦の速かなる終結を願ふ感情が湧くかも知れぬ。しかしこの感情こそ戦争遂行の大きな敵であつて、敵側の抗戦力を左右するものである。

また現實容共抗日の敵が依然として頑張つてをり、これが存在する限り、帝國としては武力による壓服をいささかも緩めることはできない。殊に敵は最近第二期第三次の整備訓練期と稱し、窮乏の中にあつて必死の抗戦力

培養に努めつゝある。もとよりその抗戦能力の恢復は、到底昔日の如き姿を再現せしめることは不可能なことであるが、一戦毎に弱まりつゝあるが、これを屈伏せしめ最後の止めを刺さねばならぬ。帝國としては、五年でも十年でも、敵が降伏するまで武力作戦を續行せねばならぬ。

過日新中央政府の樹立せる事實は、敵に精神的打撃を與へ、その戦争指導を困難ならしめたことは吾人の想像以上で、「日本は武力が既に弱つたので、それに代ふるに政治攻勢の手を使ったのだ」と勝手な理解をつけて民心をごまかさうとしてゐる。そこで行はれたのが今回の北支、中支方面に於ける積極的大掃蕩作戦で、目標はもとより敵を捕獲してこれを撃滅するにある。

戦地は時恰かも初夏の候、大陸特有の熱風が襲ひ來り、

黄塵天を覆ふやうな悪い時期にもかゝはらず、遠征の將兵は元氣に活躍しつゝあるのである。

二、最近の主な戦闘

1 晋南作戦

去る四月十七日頃から開始された山西省東南部晋南地区の大掃蕩戦は、衛立煌の率ゐる約六萬の敵中央軍に對する包圍作戦で、既に多大の戦果を収めてゐる。晋安南方澤州を中心とする山岳地帯により、山西、北支の治安

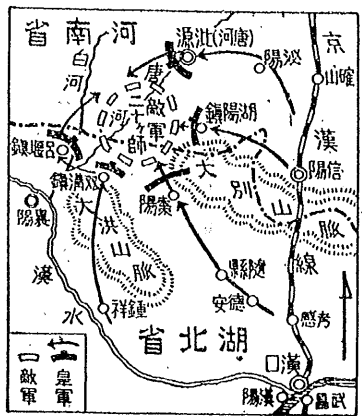
軍は澤州を始め各要地に分駐し、附近殘存匪の掃蕩を續行中で、山西奥地の明朗化は日一日と進んでゐる。

2 青陽(江南)方面の作戦

去る四月二十日過より、蕪湖、湖口間揚子江南岸青陽を中心とする地区の大掃蕩戦が行はれた。本作戦は、揚子江方面に比較的接近せる顧祝同麾下の第三戦區の敵を撃破し、以て揚子江航行の安全確保を企圖せるものであつて、蕪湖方面より南進せるわが部隊は、安慶南岸地区方面より東進せる他の部隊と共に敵を青陽附近に包圍し、これに多大の打撃を與へて撃退し、四月末一應その作戦を終了した。(上の地圖は五月九日に於ける事)

3 漢水方面の作戦

漢口西北地区に駐屯せるわが軍は、去る五月初めより前面に對峙せる第五戦區の敵に對し一齊に攻撃を開始した。各部隊は折からの炎暑を冒し、地形の困難を克服し、途中敵の抵抗を撃破しつゝ前進を續行中で、五月七八日頃には早くも沮源、棗陽、呂堰鎮(襄陽東北)の線に進出、敵に對する包圍態勢を完成しつゝある。



擾亂の策源地をなしてゐた敵十八萬も、この作戦によつていよく掃蕩されることとなつた。目下、

その後における

佛印ルートの爆撃

海軍省海軍軍事普及部

起となり、佛印に集積中の軍需資材を奥地に輸送させるための主要輸血路と化したものであるが、今次のわが海軍航空部隊の猛爆により破壊に歸したのである。

廣西省猛爆

わが海軍航空部隊三原少佐の率ゐる増永、中村、鍋田の各部隊は、四月四日廣西省平馬渡船場附近軍需品集積所、汽船、ジャンク群及び自動車群等に對し、巨弾の雨を降らせ倉庫一棟を炎焼させるとともに、附近四個所から燃料油の猛烈なる火焰を發生させ、渡船場に船集中の約數十隻のジャンク及び汽船一隻に命中弾を浴せ一舉にこれを破壊し、悠々基地に歸還したのである。

この佛印から平馬を經由して貴州、四川に通ずるこの輸送路は、わが海軍航空部隊の數度の遠征鐵道爆撃に、佛印、昆明間の輸送意の如くならず、最近蔣政權が躍

敵空軍基地爆撃

(イ) 湖南省急襲

本年度初頭、南支方面において、わが海軍航空部隊のため致命的打撃を受け、久しく蟄伏してゐた敵空軍は、近時やゝ蠢動の兆が見えてきたので、十二日、島田少佐の率ゐる海軍機の精銳は大編隊をもつて湖南省敵航空基地芷江を急襲、同地東北部より猛烈な敵の防禦銃砲火を蒙りながらも、全機克く飛行場上空に突入、場内滑走路及び附屬軍事施設に全弾を集中爆撃し、これに甚大な損害を與へ、飛行場内から火焰の空に沖するのを認め、全機無事に歸着した。

(ロ) 浙江省方面奇襲

これに引續いて中支においては、十五日夜半から十六日午前にかけて、折から大陸初夏の月明を利用して大舉中支敵空軍基地爆撃に出動した。即ち、島田少佐、奥山、池田、千連各大尉指揮の精銳部隊は、浙江省麗水、江西省玉山、上饒(廣信)吉安など、各敵空軍前線基地を奇襲して多大の戦果をあげた。池田、奥山兩大尉指揮の第一攻撃編隊は、十六日午前一時半ごろ相前後して麗水飛行場を急襲したが、城内に敵機の影も認めず、悠々と滑走路を爆撃、別働隊はさらに長驅、上饒(廣信)を急襲、こゝでも敵機の影も認めず、驛構内の貨車群に巨弾を浴せ、その全部を炎上させた。

第二次攻撃隊島田少佐指揮の一隊は、同日再度麗水、玉山を奇襲、驛構内機關車庫、石炭倉庫を爆撃、第三次攻撃部隊千連大尉指揮の一隊は、同九時半、吉安飛行場を空襲、同飛行場滑走路、倉庫群を爆撃炎上させ、別の一隊は同八時十分麗水を奇襲、同飛行場を完膚なきまでに猛爆したのち、全機無事歸還した。

(ハ) 四川省奥地の爆撃

わが海軍航空部隊の奥地攻撃隊は、島田少佐總指揮の下に、二十二日午後、突如重慶西方百十里敵飛行基地宜賓(敘州)に現はれ、市内の北方飛行場に集積中の敵大空軍を徹底的に粉砕、今年初の奥地攻撃に大成功を収め、彰水、南川の二ヶ所の上空で敵と遭遇したが見事これを撃退、全機無事歸還した。即ち、皎々たる十六夜の月光に銀翼を輝かせた第一陣池田大尉の指揮する一隊は、宜賓上空に巨襲を現はし、飛行場北方に集中大爆撃を敢行、第二陣奥山大尉の一隊は、同市の飛行場南部を、ついで第三陣中村大尉の一隊と三回に互つて巨弾の雨を降らせ、敵が次期作戦に備へて各基地から集結し、建直した大空軍を完膚なきまでに叩きつけ、多大の戦果を擧げて、二十三日未明、島田少佐以下全機無事に基地へ歸還した。

(ニ) 重慶周邊掃蕩

わが海軍航空部隊の精銳は、二十四日夜半、栗野原少佐總指揮の下に、大編隊をもつて折からの月明下をその翼を伸ばし、重慶の心臟部に痛撃を試みた。即ち、第一次攻撃部隊池田大尉の編隊は、二十五日午前

二時半四川省遂寧(重慶西北方九十マイル)を奇襲、城内及び附近軍事施設に全弾を浴せ大火災を起させ、さらに中村大尉指揮の第二攻撃隊、奥山大尉の第三次攻撃隊は重慶西南方十マイルの白市驛飛行場上空に達し、敵の數機が待機姿勢のまま格納庫前に横たはつてゐるのを見つければ、一斉爆撃に移り、全弾悉く命中、これを延焼させて、附近の軍事施設にも大火災を起さした。

重慶周辺の防空上の敵重要空軍基地たる遂寧、白市驛兩飛行場の爆撃を敢行し、全機無事歸還した。續いて、三十日夜明前、島田少佐の率ゐる海軍航空部隊は、亦も四川省を襲ひ、重慶周辺の飛行場三ヶ所を猛爆した。先づ奥山大尉の率ゐる編隊群は、暗黒の中に横たはる廣陽廟飛行場に巨弾を浴せ、池田大尉の編隊は黎明以前の白市驛飛行場を敵高角砲、機關銃の抵抗の中に悠々猛爆、大火災を起さしめて、炎は天に沖した。更に中村大尉の部隊は日出前の梁山飛行場に現れ、上空で待期中の敵機を撃退して、城内の軍事施設を爆撃し、各隊とも全機無事歸還した。

滇越線爆撃

わが三原少佐、増永、丸妻兩大尉の指揮する海軍航空部隊の大編隊群は、二十六日密雲を衝いて佛印國境をさる六十キロの白泰上空に現はれ、滇越線鐵橋目がけて巨弾を浴せ、これに徹底的損害を與へ多大の戦果を收め、全機無事に基地飛行場に歸還した。

結 び

今次の佛印ルートの爆撃は、新支那政權の樹立と同時に、全く一地方政權化した蔣政府が、最後の輸送路と頼む佛印からの通路を完全に遮断したものであつて、四川省奥地における重慶附近の敵空軍基地爆撃は、わが佛印ルート爆撃部隊に對抗のため密かに再起を圖つてゐる支那空軍の出現をくじくものである。さきに蔣介石が試みた冬季攻勢は畫餅に歸し、今また唯一の輸送路たる佛印ルートを遮断された重慶政權は、わが海軍航空部隊の連日に亘る息をもつかざる爆撃により、いよいよ没落の一途をたどつてゐるのである。

二 千 六 百 年 史 抄

鎖 國

内閣情報部參與

菊池 寛

秀吉の朝鮮出兵は、朝鮮を討つためではなくて、大明國を征するの目的であつた。そして、この半島出兵は、結局失敗に終つたが、當時の日本は、民族的にも國家的にも、このくらゐエネルギイが横溢してゐて、倭寇以來の大陸進出の風潮が、國家的に發現したのである。然し、この旺盛な海外發展の本能も、徳川氏の鎖國政策によつて萎縮したのである。

秀吉は、聚樂第の造営や大佛殿の建立、大阪、伏見の築城、朝鮮出兵と、華美好きに任せて莫大な費用を使つたやうに見えるが、少しも金には困らなかつた。大阪城が陥るまで、秀吉が蓄へ置いた金銀は、家康を怖れさせたといふのである。

家康は、あれほど質素儉約を旨とし、金銀の貯蓄に努めながら、彼の死後四十年で早くも財政

の窮乏に苦しんでゐるのである。だから、秀吉の天下は、制度や法令の力ではなくて、財政の力で支へられてゐたと言へる。しかも、その有力なる財源は、外國貿易に依つたのである。

それを、江戸幕府は、何故に鎖國したか。表面の理由は、キリスト教が口實になつてはゐるが、事實は、海外からの活氣ある自由な商業資本主義的風潮が、土地と農民を經濟的基礎とする封建制度を、侵蝕すると信じたからである。徳川封建政府を維持して行くためには、日本を永久に農業的鎖國にしておく必要があつたのである。

鎖國令の實施は、寛永十年が第一回で、十三年、十六年と、三段階に分れ、次第に嚴重になつてゐる。以後、日本の造船術は、全然後退してしまつたし、日本人の頭には、鎖國は祖法であり、國是であるといふ觀念が成長し、外國人と交ることを、極度に怖れるやうになつたのである。そして、日本民族が得意とする、他國文化の吸收同化作用は、一切止んでしまつた。だから、鎖國以後は、固有の文化は發達したが、何となく不具的で益稔的で、活氣のない、いはゆる島國性を感じさせるやうなものとなつたのである。

しかも、江戸時代に、日本の人口が殆んど増減しなかつた理由は、五十年毎に襲つた大饑饉のためで、鎖國令が國外からの食糧輸入を遮断してゐるから、饑饉となると、今なほ古老が語るやうな悲惨な状態を現出したのである。

もし、鎖國令といふ桎梏を受けずに、日本民族の進取の本能に任せて海外發展が續けられて

ゐたなら、二、三世紀前、すでに南洋一帯は我が版圖になつてゐて、今ごろは日本は、東洋の平和、世界の平和のために、有力な役割を果すことが出来ただらう。いかにも残念なことである。

維新後、日本は再び開國して、世界文化に追ひ付かうとして焦つた。その焦燥は今日に於ても、歐米の模倣や、模倣から生ずる種々の社會風俗問題などとなつて露呈してゐる。

一たい、我々の祖先は、他を燕雜に模倣するには、あまりに高い文化的感性の持續を傳承してゐた。それは大陸文明の輸入時代に建立された法隆寺が、大陸の原物よりは建築學的にも美術的にも、はるかに優れてゐるといふ事實を見ても明らかである。この高い文化的感性の傳統と、天才的な吸收同化力が、弱まつたことも、鎖國が與へた大害の一つである。しかし、三百年前の西歐の文明は、それほど高いものではなかつたから、日本は、まるきり三百年、西洋から後れたといふのではない。我々の血の中に、祖先の天才的な力を目覺まして、鎖國が生んだハンディキヤップを克服し、邁進して行くべきである。

江戸幕府の構成

徳川家康は、秀吉の死後十五年も待つてゐたが、餘命が幾ばくもないことを覺つて、遂に秀吉の子秀頼を大阪城に攻滅した。

百年間も戦亂の舞臺にされてゐた社會の全體は、戦争には服きくしてゐたから、家康が立て

た江戸幕府は、その徳性はともかくとして、天下安定の重鎮としては大磐石であつたから、平和に仇あつてゐた人心は、これに歸して行つたのである。

江戸幕府の政策に一貫してゐる精神は、善政も悪政もない。自存であり自衛であつて、徹頭徹尾徳川本位である。

家康は、頼朝の鎌倉幕府の組織に傾倒したが、單なる模倣はしなかつた。舊制度の研究に熱心ではあつたが、法制道樂ではなかつた。彼は時代に順應して巧みにこれを參酌した。彼は天才的な立法者であり、巧妙な運用者であつた。だから家康が立てた政治の根本方策は、「神君が定め置かれた通り」に自動的に適用されて、代を經るに従つて、どこまでも巧妙精妙化されて行く力を内蔵してゐたのである。

家康は、鎌倉幕府や室町幕府の政策の跡に鑑みて、皇室に對し奉つて十七箇條の公家諸法度を制定し、陽には尊崇して陰には壓迫した。天皇に専ら花鳥風月の學問を御奨めし、天下に行ふべき經世有用の學は、それとなく御止めしてゐるが如きである。その他、皇室に對しては、色々誠意を缺いてゐる。

諸大名に對しては、私に婚姻するを禁じ、築城や無届の修築を禁止するなど、十三箇條の武家諸法度を厳に勵行させた。福島正則の家や、加藤清正の家は、この法度に觸れて斷絶した。

江戸幕府の制度は、外面は最も地方分権的體裁を示してゐるが、内面は最も精緻な中央集権

制で、自領内では行政權、警察權を持つてゐる百萬石の大名も、幕府の一片の命令で蟄居、國替、滅石、斷絶せしめられるので、その何れも今の内閣が地方官の變更任免を奏請するよりも、まだ容易であつた。かうして、幕府は諸大名が臣事するも支持しないも問題でない。自身の財力と兵力とで絶對的に服従させたのである。これは、家康が手本とした頼朝さへも、企て及ばないところであつた。

江戸幕府の制度が整備したのは、三代の家光の時代で、その職制は、幕府の重職に大老、老中、若年寄の三役があり、その下に三奉行がある。

大老は一人で、諸役の上にあつて大事を總裁した。これは適當な人物がなければ、闕いたまふであつた。老中は年寄とも云ひ、譜代の五、六萬石から十萬石の大名を任じ、一切の政務を執り、大名の取締を掌つた。定員は五人である。若年寄は、老中の見習のやうなもので、旗本の取締りをした。定員は六人で、五、六萬石の譜代大名が任せられた。三奉行は、寺社、勘定、江戸町奉行の各奉行である。

大目付、目付は、それ／＼老中、若年寄の耳目となつて諸大名及び旗本を監掌した。何れも旗本の士を任じたのである。

側用人は、初めは將軍に近侍して老中へ取次役をしてゐたのであるが、後には五代綱吉の時の柳澤吉保のやうに、政事に參與して、權勢を振つた。やはり大名を任じたのである。

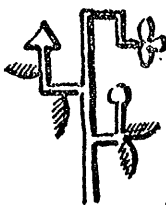
地方行政機關としては、幕府直轄領に郡代または代官を置いた。特に京都には所司代を置いて、朝廷守護の名の下に、公家及び畿内以西の大名を監視させたのである。なほ、大阪と駿府には城代を置き、その下に町奉行を置いた。この外、奈良、伏見、山田、日光と、金銀山の佐渡、貿易港の長崎、堺、下田等にも奉行を置いたのである。

大名の取締りは最も重要問題だが、徳川氏の一族たる親藩と、關ヶ原役以前から家臣であった譜代と、關ヶ原までは徳川の朋輩であつた外様とを、大小親疎に従つて、その領土を大牙錯綜させて配置し、牽制の妙を極めたのである。

又、參勤交替は、信長、秀吉の時に、安土や大阪に諸大名が邸を置いて滞留したことがあつたが、家光の時代に制定したものは、全國大名の大きかりな定期點呼であり、人質制度でもあつた。この參勤交替は、諸大名の財政難や地方の疲弊など、いろいろの弊害を生んではゐるが、國內要路の發達とか、貨幣制度及び流通組織の急速な發展、地方産業の振興、都市の繁榮、中央文化の地方傳播など良い意味での副作用をも起してゐるのである。

又、徳川幕府は、頻々として諸大名の移封を行つたが、それは鎌倉、室町の時代のやうに、諸大名を同じ領地に定着させては、中に財政家がゐるで民心を得、富強を致す者ができては、江戸幕府が危いからであつた。

(この二百六十年史抄に限り無断轉載を禁ず)



近東の現状 外務省情報部

去る四月三十日、英國政府はイタリヤ朝野最近の動向に對應するためと稱して、英國船船に對しスエズ運河經由地中海航路を避けて南アフリカの喜望峯經由航路をとるやう指令を發し、それとともに英佛兩國の主力艦隊が續々エジプトのアレクサンドリア港一帯に集結され、地中海の風波はとみに險しくなつた。

それに次いでエジプト政府は、五月一日、エジプト全土に互り非常防禦措置を實施するとともに、翌二日、マヘル・パシア首相司會の下にランブソン駐埃英國大使、ウィルソン英國エジプト艦隊司令官等の參集を求めて重要會議を開催し、一方英佛軍はアレクサンドリア港における艦隊集結と相俟つて近東地方に兵力増強が傳へられ、即ちシリア方面における佛軍兵力は、最近一ヶ月間に十五萬より二十萬

乃至二十五萬に増強され、また現兵力六萬と稱される英軍のバレスクイン及びエジプト部隊にも近く濠洲、ニュージ・ランドより増援部隊が到着の豫定と傳へられ、トルコにおける各新聞も若し戦争が擴大する場合トルコは英佛側の通告があり次第、直ちに起つて英佛側に參戰する用意ありと報じてゐる等、バルカン、東地中海方面への戦火波及の危険性増大につれ、それに關聯する近東地方諸國も事態の急變に備へるため必死の準備活動を開始するに至つた。

西南アジア、いはゆる近東及び中東地方が、太陽に惠まれる南方に出口を求めてやまないロシアと、大帝國網の維持に躍起となつてゐる英國との葛藤地とされてきたことは既に久しいものである。

即ち、一八五四年當時には、クリミア戦争(英、佛、土、サ

ルディニア四ヶ國對ロシアの形において、一八七七年には露土戦争の形において、近東中東地方をめぐる英露の争戦がくり返され、前世紀末頃からはそれにドイツの陸路バグダッドを経て印度洋進出の運動が介入するに至り、事態はとみに複雑となり、深刻化したのであった。

ついで第一次世界大戦となり、帝政ロシアは崩壊し、ドイツの大望も空しく大墜し、こゝに近東地方一帯は一先づ英國の勢力下に收められた。が、やがてソ聯は赤化工作の貌によつて再びそれら各地への進出を企てるに至り、その後エチオピア問題で英伊關係が悪化するや、イタリアの近東回教諸國に對する工作は或る程度まで功を奏し、たゞに近東地方における英國の地位は頗る動搖するに至つた。既にそれよりさき、イランにおいては國權回收運動が盛んとなり、石油利権をめぐる反英抗争が積極化し、パレンスタインにおけるアラブ猶太兩民族の紛争も悪化の一途を辿り、ついでトランスヨルダンにも内紛が激化され、イラクにおけるモスール油田の如きに至つては、英伊兩國の當事者間に三度もその支配權の争奪が繰かへされたのであつた。かくして、一九三八年、英伊協定の成立と前後して復興

ドイツはいよいよイタリアに代つてそれら近東地方に經濟本位の實質的な進出振りを示すに至り、こゝに英ソの宿命的争筋線へドイツが再び介入し、期せずして英ソ獨三列強の角逐場とされることとなつたのである。

それに對し、近東諸國間には、近來二つの集團勢力が築かれてゐる。一つは、大アラブ主義の旗幟の下に、イラクを初めとしてエジプト、サウデイ・アラビア、イエーメンの諸國が結び、トランスヨルダン、シリア、パレンスタインのみならず、アフリカ北部一帯のアラブ語常用各地とも密接な接觸を進めて來てゐるものである。他の一つは、一九三七年七月に相互國境の不侵略を目標として結ばれたトルコ、イラン、イラク、アフガニスタン四ヶ國間のサーグバッド協定に據るものである。但し、この兩集團が、かつて英國の委任統治領であつたイラク王國によつてつながりを持つ、といふ特殊性を帯びてゐるものであることは見のがせない。即ち、最近數年來のイラク政情がしばしば不安であつたことは、イラクを掌中に收めることによつて、それら兩集團に勢力を及ぼし得る餘地があるため、専ら歐洲列強の進出の目標とされ

た結果に外ならなかつたのである。

そして去る九月三日、遂に大戦が勃發するや、それら近東中東の諸國中、まづトランスヨルダンは熱狂的に對英援助を申出で、パレンスタイン及びシリアは英佛の行動に順應し、エジプトは一九三六年の英埃同盟條約により、英佛の對獨宣戦と同時にドイツとの外交關係を斷絶し、イラクも遂に一九三二年の英伊同盟條約に基づいて九月六日ドイツとの國交斷絶を宣言するに至り、また、ソ聯と國境を接するイラン及びアフガニスタン兩國は英對獨ソの微妙な關係を懸念しつゝ、九月四日及び九月六日にそれら中立の聲明を行つたのである。サウデイ・アラビアは、早急に向背を敢へて決する必要を認めないやうな態度を示したが、實際問題として現在までのところでは少くとも反英ではないものと見なされてゐる。

なほ、サーグバッド四國協定の盟主と評されてゐるトルコが、十月十九日に至り、遂に英佛と三國相互援助協定を結び、少くとも英佛對ドイツの戦争に關する限り英佛側に

立つことを明らかにしたのは周知のところであるが、それは獨ソのポーランド分割に次いで、バルカンならびに近東地方に對する獨ソの重壓がにはかに増加し、トルコとしてはその重壓に對抗するために英佛の援助を頼むのやむを得ない情勢となり、且つ英佛側としても獨ソのバルカン及び近東地方への進出を抑へるために、是非ともトルコを自己の陣營に引込む必要に迫られ、とりわけドイツの近東中東への通路を斷ち、ソ聯を黒海に封鎖し中東地方に對するソ聯の脅威を牽制するため、近東作戦を企圖するには絶対にトルコの協力が必要な結果、遂に英佛對トルコ協定の成立となつた。

かくの如き事情の下において、近東地方の情勢を支配するトルコの動向が最も重視されて來たのであるが、英佛土協定の成立以來トルコとドイツとの關係が悪化したことは當然であり、去る二月に至りトルコ海軍省のドイツ人技師解雇事件や首都イスタンブールにおけるドイツ資本のクルップ造船所の占據事件などが起り、獨土關係の緊迫が傳へられた。然し、當時のドイツとしては英佛との長期戦に

備ふべく、バルカン地方の物資を獲得するとともにルーマニア、ブルガリア、トルコを通じて近東、中東及び東洋に通ずる物資運搬路を確保せんとし、バルカン地方の中立保全に努め、ために二月末に至り獨逸第二、三、四、五協定の成立となつた。

一方、トルコは極力中立保持につとめるとともに英佛側と緊密な聯絡をとり、英佛軍のシリア方面への増強と相應じて、英佛の指導援助の下にブルガリア國境寄りに要塞を構築し、ダーダネルス海峡の防備完成を急ぎ、二月十九日に國防法を實施して戰時體制を強化するに至つた。そして三月に入り、ルーマニアが百六十萬の動員を行ふや、トルコもそれについて動員の完了が傳へられたのである。

トルコについて重要視されてゐるのはイラク及びイランであるが、イラクは近東地方における屈指の空軍根據地として、また歐洲より印度への空路の要衝を占め、且つ石油の供給地（一九三九年中産油約四百四十二萬噸）として英帝國網に絶対不可欠とされ、世界大戰後所定の英國委任統治期

限を過ぎて獨立の王國となつてから未だ八ヶ年であるが、大アラブ主義運動の勃興に際し、正真正正のアラブ民族主國を以て自任してをり、その富裕さはアラブ諸國中隨一と號されてゐる。但し、その反面においてこのイラクはサスン、財閥などの發祥地でもある通り、同國經濟界にはアラブ人のみならず、ユダヤ系勢力が根強く張つてゐる事實も、イラクの國勢を概観する上に看過できない要素とされてゐる。

そして建國の經過からして、初代のフエイサル王當時のイラクが親英第一主義であつたことは云ふまでもないが、二代のガージ王となり、やゝもすれば反英風潮が表はれ、最近數年來展、惹起された政變の背後には常に列強の影が映つてゐたとさへいはれてゐたが、去年ガージ王の御急逝以來、幼王を補佐する攝政政治となり今日に及んでゐる。かくて、去る二月、イラクにおけるヌリ・サイド内閣は、その親英政策を國軍方面から非難されて辭職したが、その後を受けたイラン臨時内閣は果敢にも軍部内の反英分子の掃蕩を斷行し、ついでサイド前首相は再び組閣して外相を

發掘し、從來の親英政策を一層徹底するに至つた。

因みに、イラクはトルコと一九二六年に友好協定を結んでをり、元來イラクにはトルコ方面からの移住者も多く、またアラブ民族主義者としてのイラク人の内には新興トルコを敬慕する者が多數あり、これらがイ土兩國を親善關係に導いて來たものと見られてゐる。

イラクにつづくイランは、元來英ソ獨三列強の角逐場となつてゐただけに、その動向は極めて注目されてゐる。

世界第四位の石油國イラン（一九三九年中産油約一千一百五十二萬噸）は、未だその住民の八割までが耕作によつて生活してゐる農業國であり、一九二五年以來反ソ反英の態度をとつてゐたが、昨年以來、英國と極めて密接な關係にあるエジプトと接近するに至つたことは注目し、値ひしやう。

そして、從來ソ聯側はイランに對して専ら經濟的壓迫と赤化工作により、イランの對英關係を断たせようとするつもりで來たのに反し、英國側はイランの財政困難等の事情に乗じてクレディットや物資の供給による經濟工作によつて着着對ソ作戦の基礎を固めてゐた。最近も英國はイラン政府

に對し、石油採掘の特許権を擔保として五百萬磅を鐵道計畫の促進のため融資し、ソ聯も躍起となつてイランと新通商航海條約の假調印を行ふに至り、イランをめぐる英ソの角逐は刻々に激化しつゝある。

次にエジプトは去るエチオピア紛争を契機として、リビアとエチオピアとの兩伊領に挾まれる成行に直面し、且つ英國側もスエズ運河確保の必要を痛感させられ、こゝに英埃兩國の歩みよりとなり、即ちイタリヤの東アフリカ進出は期せずして、英埃關係を過去五十年の抗争から一變させるに至つた。

又、サウディ・アラビアが、去る世界大戰の當時からその統治者サウド王の巧みな行動によりしばしば英國外交に後塵を吸はせて、大アラビア復興王の名を、恣にしてきたことは餘りに有名である。そしてアラビア經濟生活の近代化に際しても、努めて歐洲の列強勢力を介入させぬような方針で進んできたのであるが、近來同僚の回教徒といふ建前によるエジプト資本の進入は著るしく、先頃結ばれ

昭和研究會刊行物

- 支那新中央政權と通貨對策 (二五五頁) 二五〇錢
 - 米穀專賣案要綱 (二五五頁) 二〇〇錢
 - 我國配給機構改革試案 (二五五頁) 二〇〇錢
 - 我國勞働政策の基本方針 (二五五頁) 二〇〇錢
 - フロンク經濟の本質に關する報告 (二五五頁) 二〇〇錢
 - 新日本の思想原理 (二五五頁) 二〇〇錢
 - 協同主義の哲學的基礎 (二五五頁) 二〇〇錢
 - 豫算編成に關する覺書 (二五五頁) 二〇〇錢
 - 民間經濟中樞機關試案 (二五五頁) 二〇〇錢
 - 農業團體統制試案 (二五五頁) 二〇〇錢
- 直接本會事務局へお申込み郵券代用可、送料各三錢

合本

六〇錢

東京市丸の内四丁目七番地
昭和研究會事務局
 電話五三〇五内丸 東京三番四五六二番

たエジプトとサウディ・アラビア間の經濟協定には、アラビアの軍用道路建設に關する取極めさへも含まれてゐたほどこで、結局經濟的に現今のエジプト即ち英國の影響下におかれてゐる大勢を示してゐる。

以上のやうな近東情勢の下に、英國は近來をれら方面に對する獨伊ソの動きを牽制すべく、しきりにサーグバッド條約加盟諸國(イラン、トルコ、アフガニスタン、イラク)に働きかけてゐると傳へられてゐるが、右諸國の中、最近特にトルコ、イラン兩國間の國交密接となり相互援助條約成立し、トルコはこの程イランに對し、イランが若し第三國より攻撃を受ける場合、トルコは全力を擧げてイランを援助する旨の保障を行ひ、イランもこれに對して好意を示してゐると傳へられる。

一方、トルコ、イラン兩國とエジプトとの關係も最近甚だ接近しつゝありと傳へられてをり、かくて一度挫折したサーグバッド條約を現行の不侵略條約より軍事的相互援助條約に發展させようとする運動は、アフガニスタンの代りにエジプトが加はり、異なる形において英國の勢力を背景とし、近東、中東を結ぶ回教四ヶ國互助協定成立の豫想が傳へられてゐることは注目に價する。

即ち、最近この方面に對するソ聯の進出説も下火となつた折柄、以上のやうな英國側の進出は、今後この方面に特に多大な關心を有するイタリヤに重大な影響を及ぼすものと見られてゐる。

前號(税制特稿)正誤

八頁 基礎稅務の第四番目所得稅の門とあるは、門の誤り

九頁 乙種所得稅二行目、その他の項目は、その他の項目の誤り

十一頁 乙種所得稅子所得五行目、利益の配當は利息の配當の誤り

十二頁 不動産所得稅十一行目及び同頁山荘所得稅四行目の所得稅と臨時所得稅とは異なるは、所得稅はの誤り

十八頁 下段より、四行、増徴稅金の總額は、賦課金額増徴金の總額の誤り

四十四頁 入場稅第一種中、發行場は、發行場の誤り

四十四頁 物品稅第一種中、發行場は、發行場の誤り

四十四頁 物品稅第二種中、發行場は、發行場の誤り

四十五頁 下段より、前項は、前項の誤り

四十五頁 遊樂稅、通行稅、給養稅は、遊樂稅、通行稅、給養稅の誤り

○遊樂稅、通行稅、給養稅は、遊樂稅、通行稅、給養稅の誤り

寫眞週報

昭和十五年五月十五日印刷發行

編輯部 内閣情報部

印刷部 内閣印刷局

發行部 東京市麹町區大手町

定價 一、部、五錢(送料別)

外購に依る場合は送料共、一部十錢

申込所 内閣印刷局發行課

全國各地官報販賣所

東都書籍株式會社

各書店・譯賣店

露光量違いにより重複撮影

昭和研究會刊行物

支那新中央政權と通貨對策 (二五五頁)	實價	二五錢
米穀專賣案要綱 (二五〇頁)	同	二〇錢
我國配給機構改革試案 (二四九頁)	同	二〇錢
我國勞働政策の基本方針 (二四九頁)	同	二〇錢
ブロック經濟の本質に關する報告 (二四九頁)	同	二〇錢
新日本の思想原理 (二四二頁)	同	三〇錢
協同主義の哲學的基礎 (二四九頁)	同	二〇錢
——新日本の思想原理續篇——	同	二〇錢
豫算編成に關する覺書 (二四二頁)	同	六〇錢
民間經濟中樞機關試案 (二四二頁)	同	六〇錢
農業團體統制試案 (二四二頁)	同	六〇錢
合本		

東京市丸の内四館七號
昭和研究會事務局
 電話丸の内五〇三五 辰替東京一三〇五二番

直接本會事務局へ乞申込郵券代用可送料各三錢

たエジプトとサウジアラビア間の經濟協定には、アラビアの軍用道路建設に關する取極めさへも含まれてゐたほどで、結局經濟的に現今のエジプト即ち英國の影響下に置かれてゐる大勢を示してゐる。

以上のやうな近東情勢の下に、英國は近來をれら方面に對する獨伊ソの動きを牽制すべく、しきりにサーダバッド條約加盟諸國(イラン、トルコ、アフガニスタン、イラク)に働きかけてゐると傳へられてゐるが、右諸國の中、最近特にトルコ、イラン兩國間の國交密接となり相互援助條約成立し、トルコはこの程イランに對し、イランが若し第三國より攻撃を受ける場合、トルコは全力を擧げてイランを援助する旨の保障を行ひ、イランもこれに對して好意を示してゐると傳へられる。

一方、トルコ、イラン兩國とエジプトとの關係も最近甚だ接近しつゝありと傳へられてをり、かくて一度挫折したサーダバッド條約を現行の不睦條約より軍事的相互援助條約に發展せよとする運動は、アフガニスタンの代表トヘンブトが加はり、異なる形において英國の勢力を背景とし、近東中東を結ぶ回教四ヶ國互助協定成立の豫想が傳へられてゐることは注目し得る。

即ち、最近この方面に對するソ聯の進出認め下火となつた折柄、以上のやうな英國側の進出は、今後この方面に特に多大な關心を有するイクトリアに重大な影響を及ぼすものと見られてゐる。

前號(税制特輯)正誤

八頁 基礎經濟學第四篇所得稅三門とあるは三門の誤り
 九頁 乙種所得稅二行目、その他の種目、は、その他種の誤り
 十頁 乙種所得稅五行目、利息の配當は、利息の配當の誤り
 十一頁 乙種所得稅六行目、行目及び同頁右側所得稅四行目、の所得稅と臨時所得稅とあるは、所得稅の誤り
 十二頁 乙種所得稅七行目、所得稅の課税は、所得稅の誤り
 十三頁 乙種所得稅八行目、所得稅の課税は、所得稅の誤り
 十四頁 乙種所得稅九行目、所得稅の課税は、所得稅の誤り
 十五頁 乙種所得稅十行目、所得稅の課税は、所得稅の誤り
 十六頁 乙種所得稅十一行目、所得稅の課税は、所得稅の誤り
 十七頁 乙種所得稅十二行目、所得稅の課税は、所得稅の誤り
 十八頁 乙種所得稅十三行目、所得稅の課税は、所得稅の誤り
 十九頁 乙種所得稅十四行目、所得稅の課税は、所得稅の誤り
 二十頁 乙種所得稅十五行目、所得稅の課税は、所得稅の誤り

寫眞週報

昭和十五年五月十五日印刷發行

編輯者 内閣情報部
 發行所 内閣印刷局
 東京市丸の内四丁目

定價 一部 五錢(發行部)
 全國各地官報販賣所
 東部書籍株式會社
 各書店、驛賣店

露光量違いにより重複撮影

週報

五月二十二日號

海軍記念日を迎へて
 低物價と利潤統制
 神武天皇聖蹟の調査
 日本語の大陸進出
 獨軍の蘭白進撃戰
 歐洲戰爭の進展と蘭印問題

特別
 寄稿 二千六百年史抄 (十四)
 内閣情報部參與 菊池 寛

第一八八號
 昭和十五年五月二十二日
 郵務特准
 行 (毎週一回水曜日發行)

週報

昭和十五年五月十一日第三種郵便物認可
 行 (毎週一回水曜日發行)

五錢

結核に 強力ビタミンB劑 オリザニン

ビタミンBの缺乏は精神
 疲労が成退する
 あるが高爾物上
 の缺乏は結核菌



東京・望町 三共株式会社

(判LA51格規定國はさき大の書本)